

# 奄美大島瀬戸内町のイビガナシ

高野 洋志

岡山理科大学工学部

(1995年9月30日 受理)

ヨーゼフ・クライナーは「南西諸島の神概念」のなかで、ノロ祭祀が、1962年の時点で、加計呂麻島において、「武名、木慈、瀬武、薩川、阿多地、花富、与路部落だけに残っている。」<sup>1)</sup>と述べている。33年後の今日、加計呂麻島のすべての集落で、ノロ祭祀は、昔のこととして語られている。祭祀の場所や信仰の対象についてはどうであろうか。

鹿児島県大島郡瀬戸内町は、奄美大島の大島海峡に面した地域、加計呂麻島、その南側に位置する請島と与路島からなっており、行政上の中心は古仁屋にある。海岸からたちあがるような険しい山が多く、今でこそ道路網が整備され、定期バスが各集落を結んでいるが、山を越える交通路より、外洋の荒波からまもられた穏やかな海のほうが、往来に適した場合もあったと思われる。大島海峡はその意味で周辺地域の交通路となってきただけでなく、来航する船にも安全な泊地を提供してきた。海峡は、奄美大島と加計呂麻島を隔てたのではなく、両岸地域一帯の社会的文化的な結びつきを強める働きをしてきた。

もともとこの地域は、平地にとぼしく、かつては焼畑耕作が一般的に行われたようだが、農業はあまりさかんではない。地域開発のための政府や県の、おもに道路整備にまわされる補助金によって経済が動いている一方で、現当地元産業と言えるのは、奥深い静かな湾が多いことを利用した、真珠や魚類の養殖、近海の鰹やマグロの漁ぐらいであろうか。自給自足する部分の多かった集落の生活は、他の多くの離島社会のように、伝統文化を、商品経済や都市化の波からある程度守ってきたといえるかもしれない。しかし、この地域を軍事上の重要拠点にした太平洋戦争、高度成長期からの人口の流失、補助金依存経済は、伝統社会を根底から変化させずにはおこななかった。この変化は、今後、加速化されることはあっても遅くなることはないであろう。

社会変化が、伝統的信仰にどのような影響を与えたかいくつかの例をあげてみる。瀬戸内町内の諸集落の近くには、ゴンゲンまたはグンギンとよばれる、旧暦の9月9日に火災予防の祈願などが行われた場所があり、多くは海に近い山だが、ここに出征兵士の武運長久を願う碑が残されていることがある。この地方からもかつて多くの兵士を送り出した。瀬戸内町の場合、奄美大島の他の地域にくらべ神社の建立は、平家伝説や為朝伝説のある集落をのぞき、戦前まであまり進んでいなかったが、戦時体制下で、本来、ノロ祭祀の場所であったミヤや神山のふもとなどに神社が建てられ、集落ごとの伝統的信仰がなかば強

制的に国家神道に組み込まれていった。ゴンゲンに残された碑や、日の丸を奉納する習慣もそのような歴史の遺産である。

帰還した兵士を迎え入れ、戦後しばらくはにぎわいを取戻した諸集落も、昭和28年奄美群島の本土復帰以降、日本の急速な経済成長と都市への働き盛りの年齢層の流出にともない、その人口が減っていった。そして、人口の老齢化は、山仕事を困難にしていった。聖地である山は、草を刈って、日常的に山道の手入れをしておかないと、ハブの多いこの地方では、立ち入ることが危険になる。この作業は重労働であり、取りやめざるを得なくなった集落が増え、そのために、祭祀場所が放棄されたり、集落により近いあまり高くない丘や、山のふもとに移されたケースがあちこちでみられる。また、祭祀場所を移動させたもうひとつの要因は、補助金により海岸にそってあたらしい道路が整備されたときに、集落の中心そのものが次第にこの道路沿いに移動したことである。それにともない、年中行事としてはもっとも大きい8月踊りや子供相撲の会場となるミヤも、新しく聞かれた道路の近くに移され、ミヤにあって信仰の対象であったイビガナシとよばれる集落の守り神の依る石や、若者の力比べに用いられてきた力石などが失われてしまったケースもある。

大都会への人口流出の、2次的影響もまた文化を変容させる要因となった。ひとつは、様々な理由から郷里に戻った人々が、新宗教などの布教活動を行い、信徒をふやしていったこと。もうひとつは、都会に居住する同郷の者が集まり、お金を募って郷里の神社を建立したり改築したりしたことである。

このように大きく変わりつつある瀬戸内町の諸集落の信仰形態のなかで、この文では、とくにイビガナシを中心に現状をみていきたい。

## 1. 南西諸島における「イビ」

まず瀬戸内町の「イビガナシ」にふれる前に、南西諸島の他の地域の「イビ」という言葉が集落の聖地に関係していることを確かめてみよう。網羅的に調査がなされた沖縄本島北部地方では、9つの集落で「イビ」の存在が報告されている。

- ①国頭村比地：集落では各門中の祀るオタキ（御嶽）があり、アサギ門中の管理する3ヵ所の拝所のうちのひとつが「イビヌタキ」とよばれている<sup>2)</sup>。
- ②国頭村与那：昔の共同墓の近くにある、入口が大きな石でふさがれた横穴式の古い墓が「イビ」と呼ばれている<sup>3)</sup>。
- ③大宜味村田港：集落の東に位置する山がタンナウタキで、そのふもとにある遙拝所が「イビナー」または「オミヤ」と呼ばれている<sup>4)</sup>。
- ④今帰仁村兼次：ウタキのなかに女性のみが入れる聖域があり、そこが「イビ」と呼ばれている<sup>5)</sup>。
- ⑤今帰仁村平敷：拝所のひとつが「タキ」または「イビ」と呼ばれている<sup>6)</sup>。
- ⑥本部町伊野波：拝所のひとつにウガンヤマ（御願山）があり、その中に「イビ」また

は「ウイヌイビ」と呼ばれている場所がある。以前には2, 3坪の石積みで方形の構造物が2つあり, 中になにか収められていたようだとされている<sup>7)</sup>。

⑦名護市我部祖河：集落東側の丘が「ウタキ」でその頂上部に「イビ」または「イビヌメー」と呼ばれる拝所と「オミヤ」と呼ばれる拝所がある<sup>8)</sup>。

⑧恩納村中泊：2つのウタキのうちのひとつに, 数十センチの石が立っている<sup>9)</sup>。

⑨宜野座村漢那：ウタキの頂の祠が「イビ」とよばれている。そこには戦前, 祠を建てるまで, 遺骨の入った骨瓶がおかれていた<sup>10)</sup>。

八重山諸島の御嶽は, 「ウガン」, 「オガン」, 「オン」, 「ワン」, 「ワー」等と呼ばれ, こうした聖地のなかに「イビ」がある。ただし, イビといっても御嶽によって形態はさまざまである。「ツカサ(神司)」のみが立ち入ることのできる聖域で, 石積みの間のスペース, あるいは石積みの囲いのなかに香炉がおかれているのが一般的で, 石積みのかわりに祠となっているか, あるいは最近のように社がたてられることも多くなっている。さらにその聖域のなかに, 自然石であったり, 伝説の石であったりする「イビ石」が置かれていることもある。イビ石は奄美諸島のイビガナシとも通じるので, 「八重山のお嶽」から例をとりだしてみよう。

①石垣市字名蔵の水瀬御嶽(ミズシオン)はイビが大石で, その側面にある決して枯れることのない水たまりの神が祀られている<sup>11)</sup>。

②石垣市字新川の長崎御嶽(ナースクオン)では長崎家の先祖がかかわっている由来伝説のある霊石が祀られている<sup>12)</sup>。

③石垣市字石垣の宮島御嶽(メートゥルオン)では石積みの囲いの中に「ウブ」と呼ばれる「根付き石」がある<sup>13)</sup>。

④石垣市字石垣の美鎮御嶽(ビッチンヤマ)では流れてきたという伝説のあるイビ石が7個祀られている<sup>14)</sup>。

⑤石垣市字大川水名の基斗御嶽(キドウオン)ではイビ石が祀られている<sup>15)</sup>。

⑥石垣市字登野城の天川御嶽(アーマーオン)ではイビ石は霊石である<sup>16)</sup>。

⑦石垣市字平得の蔵原御嶽(クラバルオン)ではイビは流れてきたという伝説のある霊石<sup>17)</sup>。

⑧石垣市字大浜東浜崎にある願所(カーシンヤヌニガイジュ)では横一列に並べた自然石がイビとよばれている<sup>18)</sup>。

⑨竹富島前原海岸のニーラ石拝所(ニーラン)では, 昔この浜にニーラン神が到着し各種の作物の種子をもたらしたという伝説があり, 波打ち際に1mほどのイビ石がおかれている<sup>19)</sup>。

⑩竹富島黒島小字保慶の浮海御嶽(フキワン)では浮いて網にかかってきた石を霊石として祀っている<sup>20)</sup>。

⑪竹富島黒島小字伊古の仲盛御嶽(ナカムリワン)では神司が神示をうけて掘出したイ

ビ石が置かれている<sup>21)</sup>。

⑫竹富町字黒島小字アダン原の乾震堂（カンシンドウ）では漂着した死者の供養を1世紀ほど経ってから行うことになったが、もう遺骨がなかったのでかわりに黒石を祀ったという記録がある<sup>22)</sup>。

⑬竹富島字古浜の佐久伊御嶽（サクイワン）には、数多くのイビ石が置かれている<sup>23)</sup>。

⑭竹富島字西表崎山の崎山御嶽（サキヤーンウガン）では拝殿のさらに奥に石垣に囲まれた自然石のイビがある<sup>24)</sup>。

⑮竹富島西表島南岸豊原地区の南風見御嶽（パイミオン）では成長したといわれる高さ2mほどの石が祀られている<sup>25)</sup>。

⑯与那国町島仲のなうんに御嶽（ナウンニンガン）では3個の霊石が祀られている<sup>26)</sup>。

八重山諸島の場合、「イビ」という言葉が御嶽内の聖域自体を指す場合、祠を指す場合、そしてイビ石を指す場合の3通りある。また、竹富島では、聖域を「ウブ」と呼ぶことがあり、その中にイビ石が置かれている<sup>27)</sup>。

八重山諸島のイビ石にまつわる伝説のなかに、「浮いて流れてきた石」というモチーフがあることに注目したい。津軽半島では、海辺で神や動物などの形があらわれた石をひろった婦人がイタコ（カミサマ）になったとみとめられる<sup>28)</sup>。常陸国の大洗では、嵐のあとで忽然と神の形をした石があらわれたことが神社の由来となった<sup>29)</sup>。海辺に寄る石に神をみる話は、このように日本各地にみられる。南九州では、海中からひき上げられた石をエビスとして信仰の対象にしていることから、エビス信仰もイビ石と何らかのつながりがあると考えられる。

## 2. エビス信仰

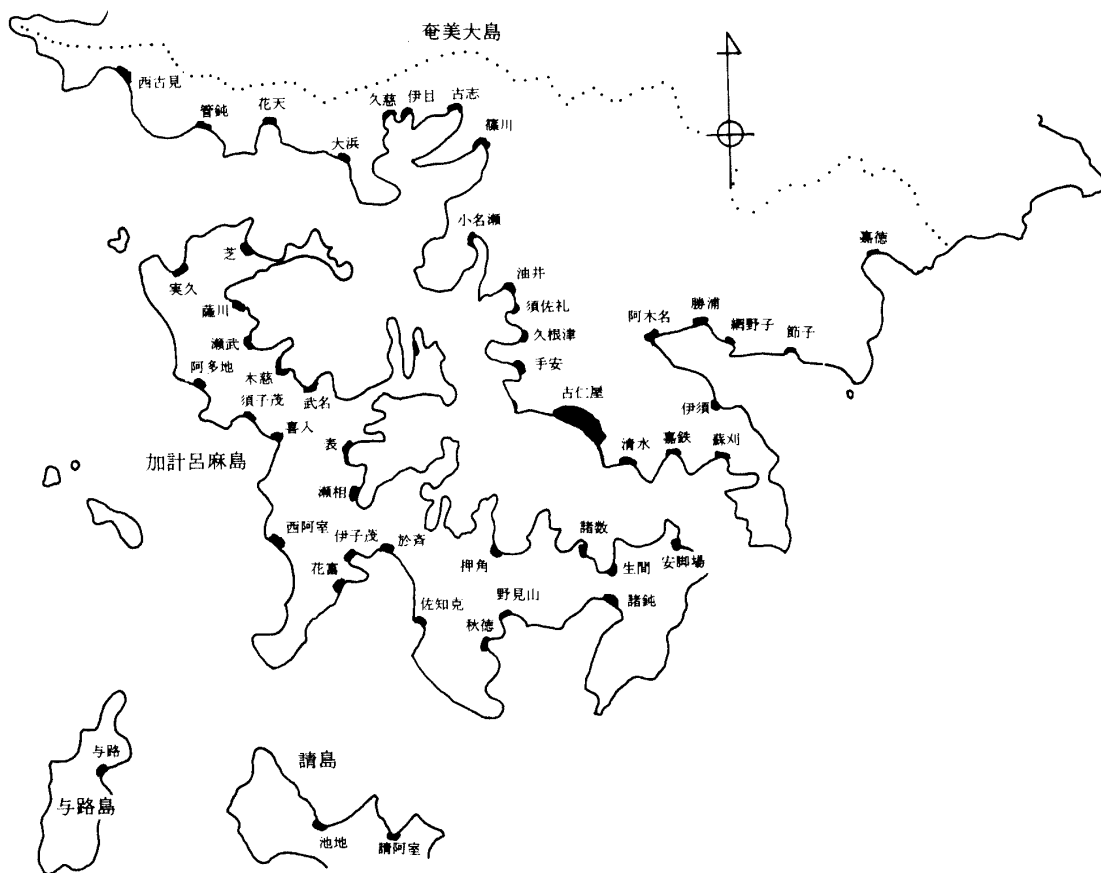
甌島では、「エビスかずき」と呼ばれる行事で男達が海中で見つけた石を丘の上の祠に奉納し、前年のものは祠の周囲につんでおく<sup>30)</sup>。ご神体となる石は地方により、網にかかって上げられたものであったり、釣り上げられたりしたものになるが、こうした習俗がトカラ列島、黒島、硫黄島、竹島、甌島、種子島、大隅半島、薩摩半島、志布志湾にみられるだけでなく、日本各地の漁村、そして奄美大島にも、イビガナシとは別に竜宮の神の依る石、あるいはエビスとして存在する。

南九州のエビス信仰のご神体は石ばかりではない。エビス神の木像か石像、あるいは漂着した水死体であったりするが、そのほとんどは豊漁を約束する神として信仰されている。このような漂着神、海からやってくる神への信仰は、その内容において、むしろ南西諸島では一般的である。しかし、もしもエビス神を祀る神社が存在するかどうかということであれば、確かにほとんどないし、あったとしても地元には多くの信者がいるとはいえない。奄美大島のエビスは、石がそのままたてであるか、それが祠に入っているものであり、カツオ漁の盛んだった頃によく信仰をあつめたようだ。

エビス信仰では、兵庫県西宮のエビス神社、大阪市の今宮エビス社、広島巖島のエビス社および島根県美保関エビス神社という4つの本山が知られており、これら本山の様式の広がりには日本全国に及んでいる。しかし前述の南九州、対馬、薩南諸島などの地方は、本山への系列化がみられない、より素朴なかたちのエビス信仰であり、石神信仰の性格も濃く、あきらかに南西諸島の石神信仰とのつながりが認められる。「エビス信仰」という名称の分布のみを基準に「大和文化圏」と「琉球文化圏」の境界線を引くことは<sup>31)</sup>、方言上の境界線をひくほどには意味のあることと思えない。南西諸島から南九州に至るまで、石神信仰と、漂着神、海からやってくる神への信仰に連続性が認められ、原型を留めているとみるべきであろう。琉球方言で伊勢エビのことを「イビ」と発音することを考えれば、「イビ」、「イビイシ」、「イビガナシ」など南西諸島の言葉が、「えびす」、「えびすさん」と同じ語源ではないかと疑うことも、決して見当はずれではないように思える。

### 3. 瀬戸内町の諸集落の現状と石神信仰

瀬戸内町には大字の数が49ほどある。そのうちイビガナシもしくはそれに相当する石神の存在する集落は、文献上か実際に現地で確認できたものが15ほどある。力石と呼ばれか



瀬戸内町概図

って若者達の力比べに使われた石のある集落はそれより多く、場所によってはこの力石も信仰の対象となっている。

イビガナシの多くは、ミヤとよばれる8月踊りと子供相撲の行われる場所かそのそばにおかれている。トネヤやアシャゲのようなノロ祭祀に関係のあった建物もミヤの近くにある。しかし、ミヤと離れた場所に公民館が建設されたときには、ミヤも公民館のそばに移されることが多かったようである。イビガナシがゴンゲンやカミヤマかそれらのふもとに置かれていることもある。

花天(ケテン)は、かつてミヤダキ、ナンガチ、ムラの3つの集落にわかれている、ナンガチとムラのあいだの小高い森に氷川神社があった。そのそばに置かれた自然石が、神社を森の下へ移転させたとき移されたようであるが、現在では確認できない。

大字の久慈には、久慈地区、現在ひとが住んでいない大浜、それに伊目地区が含まれている。これらのうち伊目は、その語源が「イビ」だという説もある<sup>32)</sup>。ここには、伝説の力持ち達が投げ合ったとされる「群石」が集落の入口にあったが、道路工事により埋まってしまったといわれている。

古志のものの集落の中心は、現在より奥にあり、ミヤも山側に位置していた。現在の公民館が昭和55年に建てられたとき、ミヤにあった土俵とイビガナシを公民館のそばに移した。神社も近くにあるが、社名がなく、あまり手入れされていない(写真1)。

小名瀬は、悲劇的な民話の主人公、「今女」の出身地として知られている。集落の入口の道路わきには、平家の落人の遺骨がおさめられているという7つの瓶がある。ミヤのそばに置かれている石のかたちは丸く、他集落のミヤにある力石に近い(写真2)。

また集落から1kmぐらいはなれた山頂にある権現には、「竜宮の神の依る石」をはじめいくつもの石が置かれ信仰の対象となっている(写真3)。これの方がイビガナシのようで、ゴンゲンが集落からはなれた山中にあるのはめずらしいが、参道はよく手入れされている。

油井は、加計呂麻島の諸鈍とならび、仮面踊りで知られている。この豊年祭りのおどりは、ミヤの古木の下にコンクリートで据えられたイビガナシの前で行われる(写真4)。また海岸には、立神とよばれる巨岩がある。

久根津のミヤには、形がにているので亀石とよばれる石が置かれている(写真5)。イビガナシとは呼ばれていないが、豊年祭に榊と酒を供えるというのは、おそらく、海神の性格をもった集落の守護神と考えられている証拠であろう。

清水(せんすい)には巖島神社があり、その社の裏に鍾乳石のイビガナシが置いてある。

蘇刈のミヤには珊瑚石が置いてあるが、イビガナシではなく「エビスさん」と呼ばれており、かつては豊漁祈願もその前で行われた。ほかに敷地内に「屋敷神」として石を置いている家がある。この家の先祖は鹿児島出身と伝えられている<sup>33)</sup>。

伊須のミヤには祠があり、そのなかに大小一対の石が置かれ、「ムランカミ」と呼ばれて



写真1 下の広場がミヤで公民館の建物が右端に見える。



写真2 丸石が4つほど置かれている。

いる（写真6，7）。また，その祠の横に一対の力石が置かれている。

網野子にはイビガナシはない。ミヤにはかつて2つの力石があったが，一つ消失し，そのかわりに集落のユタ（カミサマ）が持ってきて置いたとされる石がおかれている。

節子のミヤの近くには，島建加那志（集落開設の神）ビジディンの依る石を祀る祠がある（写真8）。

加計呂麻島の芝では，集落の中央にオボツと呼ばれる聖地があって，そこに自然石のイビガナシが置かれていたといわれていたが，もはや確認できない。

武名（タキナ）は比較的新しい集落である<sup>34)</sup>。ミヤにはイビガナシがあり，「シマゴスガ



写真3 様々なかたちの石が置かれている。一番左のものは竜宮の神の石とされ、サンゴ石である。



写真4 看板の下の丸石は力石。コンクリートの台の上に4つのイビガナシが立っている。

ナシ」とよばれ、1日と15日の墓参りの前にこの石にお参りをする(写真9)。この集落の守護神はむかしのすぐれたノロであるといわれている。集落の東側にあるゴンゲン(ティラヤマ)にも、1mぐらいの高さの自然石がたてられ神石といわれている(写真10)。戦時中は出征兵士の武運長久を祈願した。戦後と旧暦の9月9日におまいりしていたが、最近は何れも登らなくなった。

表ではゴンギンと呼ばれる聖地に石がたててあり、集落の火を守る神といわれている。瀬相では対岸の古仁屋とフェリーでむすばれており、加計呂麻島の集落のなかでは最も





写真5 「亀石」のまわりには沢山の石が置かれている。力石はミヤの方にある。



写真6 伊須の「ムランカミ」



写真7 伊須の力石

外に開かれた集落であるといえよう。グンギン（テラ）の松の古木の下に2つの神石が置かれており、どちらも氏神である。ひとつは瀬田家の火の神、もうひとつは実家のものである。また集落の中央にアシャゲとトネヤがあつて、それらのあいだにオボツ石がおかれている<sup>35)</sup>。

加計呂麻島の北西端にある実久（サネク）には、源為朝の子供実久三次郎という力持ちの伝説があり、この三次郎を祀った神社の入口には、彼が持ち上げたという大きな力石がいくつも並べられている。境内の権現を祀る祠のとなり、コンクリート製の2つの低いマウント状イビガナシがある（写真11）。



写真8 祠のうしろを登って行くとミヤがある。



写真9 武名の「シマゴスガナシ」



写真10 武名のゴンゲンの神石

実久はもともと2つの集落からなり、ミヤも2つあった。現在は、片方の集落のミヤのあったところに、内部を青く塗ったアシャゲがあり、その前にイビガナシが残されている（写真12）。もう1カ所のミヤには、公民館に隣接した広場があり、高さ1mほどの自然石とその半分程度の高さの、像を彫った石がある（写真13）。像を彫ったイビガナシは大変めずらしい。どちらも古木の下にある。神社のイビガナシは、これら2カ所のイビガナシを元の場所に残したまま、象徴的に2つのマウントのかたちで神社に合祀したものである。

須子茂も西側のナハマと東側のアナタリ、2つの集落からなっている。両方にそれぞれ



写真11 実久神社境内のイビガナシ



写真12 実久のイビガナシ1



写真13 実久のイビガナシ2

ミヤがあり、トネヤ、アシャゲとイビガナシがあったが、現在はナハマのものしか残されていない。消失したアナタリのイビガナシは30cmほどの高さの小さなものであったという。また、現在の集落の東側の川向こうの山裾には、かつて奥の高いところにあったグンギンを移設しており、道路から15mほど階段をのぼった所に80cmほどの高さの石がおいてある(写真14)。

花富のイビガナシはタブの木であった。集落の西側にカミヤマがあって、それを南北に割る形でミヤが中央にある。南側のカミヤマにそのイビガナシがあったといわれている。

#### 4. 石神信仰の諸相

瀬戸内町の諸集落に存在する信仰に関係する石は、イビガナシだけではない。まず、その種類をみてみよう。



写真14 須子茂のゴンゲンの火の神



写真15 石敢当



写真16 石敢当

- ①イビガナシ：多くは、ミヤの一角かそのそばに置かれている。小名瀬のようにゴンゲンにおかれていることもある。節子や伊須のように、祠のなかに納められているものもある。形と石質は様々であるが、加工されていない自然石がほとんどである。
- ②火の神：ゴンゲンに置かれた火の神は、形の上ではイビガナシに準ずる。石は置かれていないが、権現を祀った祠においてある場合もみられる。道教の影響で信仰される竈神はヒニヤムガナシとよばれ、各家庭の台所の他、祭祀用のトネヤなどの3つの小石を三角形に置いたものや、土を竈型に盛ったものがあり、集落全体の行事には直接関係していない。ゴンゲンの火の神は瀬相の例のように、もとは集落のなかで有力な家系の氏神であるか、それが集落全体の祖霊として信仰されるようになったものだ

といえる。

- ③力石：もともと信仰の対象ではなく、祭りのときに若者達が力比べをするのに使用された石である。イビガナシや火の神の石には、祭りの時に接触を禁ずるなどのタブーがあるのに、すぐそばに置かれていながら力石にはそういったタブーがない。ただし、英雄伝説に関係する力石は別で、移動が禁じられている例がある。人口の老齢化が進み、若者の姿が減り、力石は実際に持ち上げられることもなくなり、何の石か分からなくなったり、反対にイビガナシのように扱われるようになったりする例がある。
- ④立神：渡連の沖にある岩場は帆かけ船のかたちをしており、タチガミとよばれる。節子の沖にある岩はタマタディルと呼ばれ、キャラユキダルという美女神が流れていくのを招き寄せたといわれている。油井の海岸にある巨岩が、タチガミとよばれている。西古見の沖には、ウキヌタチガミ、ナハンタチガミ、ネイトヌタチガミとよばれる3つの石神がある。立神ではないが、西阿室の浜にはノロ石と呼ばれる大きな岩があり、「ネリヤの神」が立ち寄って腰掛けるといわれている<sup>36)</sup>。

瀬戸内町以外の奄美大島各地でみられ、それぞれ伝説がある。大和村今里の立神、名瀬の立神、笠利町節田の立神などである。これらの立神は、キビナゴなど魚を寄せるといわれている。

- ⑤石敢当(マブレイシ)：沖縄から九州各地まで広くみられ、中国から伝わった魔除けの石である<sup>37)</sup>。瀬戸内町のいくつかの集落では、T字路で道が民家の敷地に突きあたったところに置かれている。多くは平たく無文字であるが、石敢当と彫ってある場合もみられる(写真15, 16)。

立神のように海からつきでた岩礁はべつとしても、その他の石については、形状と置かれている場所によってある程度区別ができるだけで、必ずこういう形だという基準は見いだせない。しかし、これらの石は、集落の内外の特定の場所に置かれることにより、どれでもよいただの石ではなく、ある力を持った石として信仰の対象となってきた。ノロ祭祀が行われていたときは、生きた神であるノロの霊力と、カミヤマやモリヤマのような聖地での儀礼が信仰を集めていたが、ノロが姿を消してからは、集落全体が参加する行事は少なくなり、神社で行われる儀式でさえも参加する氏子は限られた範囲の人々である。石神はその単純な外観ゆえに、宗教政策の直接的影響や宗派的な動きからかろうじて生き残ることのできた、大変素朴な信仰であるといえる。

## おわりに

琉球諸島でイビとよばれる聖地の奥の聖域は、ノロあるいは神司のみの立ち入りが許された空間であり、他界(ネリヤ)の神と生きている神女との交流する場所であった。イビガナシと呼ばれる石も、それ自体が霊力を持って他界との境界の標識をなし、他界から訪れる神(祖霊あるいは海神)の依る場所として信仰をあつめてきた。石の霊力は、力石の

場合には、それを持ち上げた人間にうつり、石敢当の場合には家の敷地の外にあって、道を通ってくる魔物を遠ざけた。

イビガナシが置かれる場所は、瀬戸内町ではミヤが多い。ミヤは、8月踊りなど、集落全体の公的行事が行われ、集落の中心近くに位置して、住民の動向がよくわかる場所である。ノロ達が、他界の神をお迎えする儀式（ウムケ）とお送り（オーホリ）する儀式を行っていたころは、積極的役割を果たすことがなかったイビガナシであったが、現在では、シマ（集落）と他界とを結ぶ唯一の通り道かもしれない。かつてのようなタブーも儀礼もないが、その存在はいまでも住民の心に、生活空間と切り離せない、信仰のもっとも基本的な感情をよび起こしていることは確かである。

#### 注

- 1) 「南西諸島の神概念」, 住谷一彦, クライナー・ヨーゼフ, 未来社, 1977, p.49
- 2) 「沖縄国頭の村落 (上)」, 津波高志編著, 新星図書出版, 1982, p.31
- 3) *ibid.*, p.55
- 4) *ibid.*, p.142
- 5) *ibid.*, p.201
- 6) *ibid.*, p.218
- 7) *ibid.*, p.309
- 8) 「沖縄国頭の村落 (下)」, p.99
- 9) *ibid.*, p.239
- 10) *ibid.*, p.275
- 11) 「八重山のお嶽」, 牧野清, あーまん企画, 1990, p.111
- 12) *ibid.*, p.121
- 13) *ibid.*, p.133
- 14) *ibid.*, p.136
- 15) *ibid.*, p.147
- 16) *ibid.*, p.148
- 17) *ibid.*, p.192
- 18) *ibid.*, p.206
- 19) *ibid.*, p.299
- 20) *ibid.*, p.324
- 21) *ibid.*, p.328
- 22) *ibid.*, p.337
- 23) *ibid.*, p.360
- 24) *ibid.*, p.418
- 25) *ibid.*, p.447
- 26) *ibid.*, p.460
- 27) *ibid.*, p.325
- 28) 「海の宗教」, 桜田勝徳, 淡交社, 1970, p.166~170
- 29) *ibid.*, p.171
- 30) 「南九州のエビス神」, 川崎晃稔, (「恵比寿信仰」, 北見俊夫編, 雄山閣, 1991, p.119)
- 31) 「エビスと水死体」, 下野敏見, (*ibid.*, p.248~249)

- 32) 「瀬戸内町の地名について」, 永山毅, 瀬戸内中央図書館郷土資料, No.382
- 33) 「蘇刈民俗誌」, 瀬戸内町教育委員会, 1978, p.121~123
- 34) 「武名ふるさと誌」, 福田和義, 鹿児島県大島郡瀬戸内町, 1994, p.40~41
- 35) 「瀬相の神様と拝所」, 田中徳夫, (「やどり」22号, 1972)
- 36) 「奄美の伝説」, 島尾敏雄, 島尾ミホ, 田畑英勝, 角川書店, 1977
- 37) 奄美諸島の石敢当については, 詳細な調査が行われている: 「石敢当探訪」第2集奄美諸島13市町村編, 久永元利, 雪屋書房

## Dieux Protecteurs des Hameaux sous la Forme de Pierre à Setouchi-chō d'Amamiōshima

Hiroshi TAKANO

*Faculté de Technologie,*

*Université pour les Sciences Naturelles d'Okayama,*

*Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japon*

(Reçu le 30 Septembre, 1995)

Les rites des noros, qui étaient prêtresses des hameaux, ont disparu de toutes les Iles Amami dans les Années 60-70. Ces rites ont été réprimés sous le régime de Guerre donnant la priorité à la cérémonie de départ des soldats et à la prière devant les temples shintoïste pour leur brillante carrière et leur survie. Après la Guerre, la transformation de la structure socio-économique ont accéléré la disparition des rites et la simplification de la vie culturelle avec l'exode d'une partie de la population vers les milieux urbains.

Si les noros étaient dieux vivants, les ibiganashis symbolisaient les dieux ancêtres. ces pierres sacrées placées dans les places de fêtes sont en quelque sorte une manifestation de la présence des ancêtres fondateurs de hameaux. Etant trop lourde, on les a abandonnés parfois lors du déménagement de place de fête. Mais il existe également des cas où la sobriété et la simplicité de ces pierres sacrées assurent la survie du culte traditionnel. Présent travail est une enquête sur place de ces cas.